



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 10 月 18 日 (土)

発行 館長 加藤 智 一

外来昆虫チュウゴクアミガサハゴロモの脅威と温暖化による拡散



近年、日本の農業や園芸分野において、静かなる脅威として注目されている昆虫がいます。チュウゴクアミガサハゴロモがそれです。

2025. 10. 16 山形

新聞でも、県内で初めて金木犀に寄生しているのが確認されたと言う記事が掲載されていました。この昆虫はカメムシ目ハゴロモ科に属し、原産地は中国山東省。その名の通り、中国からやってきた外来種であり、近年急速に日本各地へと分布を広げているようです。

チュウゴクアミガサハゴロモが日本で初めて確認されたのは 2015 年、大阪府南部でのことでした。その後、関東地方や山梨県、群馬県などでも公式に確認され、現在では関東以西のほとんどの都府県ばかりか、山形県でもその存在が報告されたということになります。侵入経路としては、果樹や園芸樹などの苗木に産み付けられた卵が輸入された可能性が高いとされます。

この昆虫の脅威は、幼虫時代のその奇抜な身なりとは裏腹に、旺盛な繁殖力と広範な食性にあります。成虫は体長 11～14mm ほどで、赤褐色の翅に三角形の白斑があるのが特徴。幼虫は白色で腹部から白い繊維状の蠟物質を広げ、防御に利用します。彼らは植物の枝に産卵し、卵を組織内に埋め込むことで枝に傷をつけます。さらに、植物体から樹液を吸汁し、糖分を含む排泄物を残すことで「すす病」の原因になります。

特に果樹への被害は深刻で、ブルーベリー、ユズ、チャなどの果樹類において、産卵痕や吸汁による生育不良が報告されており、商品価値の低下や収量減少が懸念されています。韓国ではリンゴ園やクリ園でほとんどの成樹が枯死した事例もあり、その被害の深刻さは計り知れません。

さらに注目すべきは、温暖化による繁殖域の拡大

です。チュウゴクアミガサハゴロモは、原産地では「1 年 2 化」、すなわち年に 2 回成虫が発生することが知られています。日本でも 6 月頃と 10 月頃に成虫が確認されており、卵で越冬します。気温の上昇により、羽化の時期が早まり、繁殖サイクルが加速している可能性があるのです。実際、昨年よりも 2 か月半早く成虫が確認されたという報告もあり、温暖化が彼らの生態に影響を与えていることは明白です。

このような状況下で、農業の現場では防除対策が急務となっていますが、現在のところチュウゴクアミガサハゴロモに対する登録農薬は存在せず、物理的・耕種的防除が中心となっています。防虫網や防鳥網による植物体の被覆、産卵枝の切除と適切な処分などが推奨されています。

日本には在来種のアミガサハゴロモも存在しますが、チュウゴクアミガサハゴロモとは翅の白斑の形状や幼虫の色彩、腹端の蠟物質の構造などで、識別が可能です。しかし、一般の目には区別が難しく、誤認による対応の遅れも懸念されます。

この昆虫の拡散は、日本だけでなく世界的な問題でもあります。韓国を皮切りに、トルコ、フランス、イタリア、ロシアなどでも侵入が確認されており、国際的な防除体制の構築が求められています。

チュウゴクアミガサハゴロモの脅威は、単なる昆虫被害にとどまりません。それは、気候変動と生態系の変化がもたらす新たな課題の象徴でもあります。今までも、温暖化によると思われる外来種の生息域拡大については、再三取り上げてきましたが、私たちはこの小さな生き物を通じて、環境の変化に、もっと真剣に向き合わなければなりません。そんな事を時折考えながら、憂鬱な日々は続く。

